北海道の長官

フリーライター
小沢　信行（おざわ　のぶゆき）

1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。

明治維新で国の統治体制が変わり1869年に設置されたのが開拓使です。開拓長官の黒田清隆はさまざまな施策を導入し、北海道開発の礎を築きました。開拓使は1882年に廃止され、函館、札幌、根室の３県に分かれますが、1886年には再び道内一円を管轄する北海道庁に再編されます。初代長官に岩村通俊、第２代長官には永山武四郎が就き、新時代の推進役を担いました。３人の「長官」は戦前から銅像となり、傑出した開拓功労者であることを示しています。

黒田清隆　道内で初めて建設

黒田清隆は1870年開拓次官、1874年開拓長官となり、外国人技師の招へい、札幌農学校（現北海道大学）の開校、屯田兵制度の設立などに貢献します。1888年には総理大臣にまで上り詰めました。

1900年８月23日に亡くなるや、時を待たずに道内初の銅像建設計画が動きだします。同年10月６日の北海道毎日新聞は、対馬嘉三郎（かさぶろう）、森源三ら有志約200人が、１周年祭までには札幌の大通に銅像か記念碑を建設すべく、旧開拓使の官吏らと相談しながら準備を進めていると報じました。

1901年４月から銅像建設の募金活動を開始、５月には大通西７丁目を建設地と決め、銅像制作は東京美術学校（現東京芸術大学）塑造科（そぞうか）の初代教授、長沼守敬（もりよし）に委託します。

約１万人から集めた寄付金は8,400円。建設にかかった費用は7,970円で、残金は功績を記す台石の作成や植栽などに充てられました。

除幕式が行われた1903年８月25日、式場は紅白の幕で囲まれ、入り口にはアーチが設けられました。

式典では、黒田の下で屯田事務局長を務めた永山武四郎が銅像建設委員長として式辞を朗読。銅像を覆った幕が取り払われ「厳然たる故黒田伯の偉貌（いぼう）宇宙を呑むが如（ごと）く現はる、や一同は拍手を以て敬意を表しぬ」と北海タイムス（1903年８月26日）は伝えています。

式後には手踊り、素人相撲、もちまきなどの余興があり、「広き大通り筋も一時人を以て埋めたるが如き観あり」でした。

札幌・大通西７丁目に建立された黒田清隆像
（絵はがき、札幌市公文書館所蔵）

ところが、これほどまで人々の注目を集めた除幕式に黒田家の姿はありませんでした。永山ら銅像建設委員は遺族の臨席を要請していましたが、当てにしていた未亡人ないし長男の出席は病弱などの理由でかなわなかったのです。

黒田家の代理としてあいさつしたのは榎本武憲でした。当時、黒田の長女梅子は、黒田を恩人と慕う榎本武揚の申し出で、武揚の長男武憲に嫁いでいました。このため、梅子の夫が黒田家の代役となったのです。

その後、未亡人は黒田家から離籍し、長男は未婚のまま31歳で亡くなります。黒田家を守るため頼りにされたのは、梅子の長女千代子でした。千代子が黒田家の養女となり、酒勾（さこう）常清を婿に迎えたのです。

銅像は第２次大戦の金属回収で供出されましたが1967年、再建されます。同年10月14日、大通西10丁目で行われた除幕式には、子孫として黒田常清、千代子夫妻が出席、黒田家がしっかり継承されていることをうかがわせました。

この日は、札幌で黒田のほか、岩村通俊、開拓使顧問ホーレス・ケプロン、旭川で永山武四郎の銅像除幕式が実施されました。いずれも北海道百年記念の開拓功労者顕彰像です。戦前、大通公園には黒田と永山、岩村の銅像がありましたが、この地に像がよみがえったのは黒田だけでした。

札幌・大通西10丁目に再建された黒田清隆像

永山武四郎　「切なる希望」で旭川に

永山武四郎は開拓使で黒田清隆に屯田兵の配置を訴え、1878年屯田事務局長、1885年屯田兵本部長となります。1888年から1891年までは北海道庁長官を兼任。上川地方の開発や警備を重視し、1889年には国都となる「北京」を上川郡に置くよう建議します。1896年には第７師団の初代師団長に就任しました。

陸軍中将だった永山の銅像建設は1907年３月、有志の話し合いが発端でした。12月には札幌で発起人大会を開き、役員を決めます。そして1908年２月、銅像建設事務主任の大尉並河新吾が東京へ派遣され、将軍らを訪ね歩きます。

大将らの賛同を得ましたが、貴重な助言もありました。①銅像は後世に残るものだから、姿勢や位置が先輩を超えるのもであってはいけない②銅像建設を一度発表すれば十分な体制で迅速に集金しなければ、途中で挫折しかねない③乗馬像は国内にほとんどない―などでした。

こうしたアドバイスを受け、在郷軍人らが中心となり募金を始めますが、札幌では貯蓄銀行が破綻し、金融のひっ迫で経済活動が停滞。集金に展望が開けず地方へと足を延ばすものの、農業は凶作、漁業は不漁、林業は木材が大暴落という悲惨な状況に直面していました。

同じところに何度も足を運び、寄付に応じてもらわなければなりません。冬の間、厳寒の山野を回ったため凍傷に侵され、40日余りの病床生活を余儀なくされた者もいました。こうした努力の積み重ねで最終的には１万人を超える賛同を得、２万２千円以上が集まりました。

除幕式は1909年11月10日、札幌の大通西３丁目で実施され、永山の孫娘が幕を引くと、左手で剣を地面に突き立て、右手に望遠鏡を持った軍服姿の像が出現しました。

黒田の銅像は大通西７丁目にあり、東を向いて立っていました。永山はこれと向かい合うよう西向きにしました。像本体の高さは黒田と同じ3.3㍍ですが、台座を小さくすることで、全体では黒田より低いものと

なりました。

また、金の収支をはっきりさせるため建設費報告書を作りました。これらはいずれも将軍たちのアドバイスを生かした結果です。

その後、銅像は第２次大戦の金属回収で1943年、撤去されました。1967年に再建されますが、場所は札幌ではなく旭川でした。北海道百年記念の開拓功労者顕彰像を建てるに際し、地元の要望が強かったからです。

1965年に発足した北海道開拓功労者顕彰像建立期成会では、北海道商工会議所連合会会頭の広瀬経一が会長となり、旭川商工会議所会頭の中保恭一は道内の商工会議所の中で唯一、副会長に名を連ねました。旭川市長の五十嵐広三は顧問、助役の森岡政雄は実行委員に就任。さらに道、札幌市、旭川市が補助金を出すことも決定しました。

期成会の実行委員だった北大名誉教授高倉新一郎は、期成会発行の伝記「北海道のいしずえ四人」のあとがきで「永山は特に切なる希望によって、旭川市常磐（ときわ）公園に」なったと説明しています。期成会の役員構成を見ても、以前から旭川側の周到な働きかけがあったことがうかがえます。

銅像は1967年９月22日、東京から発送されましたが、東北本線で貨物列車の脱線転覆事故、さらには室蘭本線で土砂崩れが発生、貨物列車の渋滞に拍車をかけ、旭川に到着したのは10月４日。台座に据え付けたのは、除幕式３日前の11日という慌ただしさでした。

岩村通俊　札幌、旭川に戦前から

岩村通俊は1869年開拓判官となり、札幌の区画設計など街づくりを推進。退任後、道内を視察し1882年、永山武四郎よりも早く上川郡への「北京」設置を建議します。1886年には初代北海道庁長官に就任、上川地方開発のため道路や鉄道の建設に努めました。

また、札幌農学校の存続にも尽力します。当時、政府内には「学問が高尚で北海道開拓の役に立たない。廃校にすべきだ」という意見が出ていましたが、岩村は同校教授佐藤昌介から農業教育の必要性を説かれ、逆に工学科を設けるなどの拡充策を採ったのです。

佐藤はその後、札幌農学校校長、北海道帝国大学総長となりますが、常に持ち続けていたのが岩村への恩義でした。退任した佐藤は1932年春、北海道庁長官佐上信一、札幌市長橋本正治、北海道帝国大学総長南鷹次郎と協議し銅像建設を決め、４人が故岩村男爵銅像建設会の発起人総代となります。

銅像制作者本山白雲も岩村の恩に報いたいと願っていた一人です。岩村と同じ高知県宿毛市出身で姻戚関

旭川・常磐公園前に建設された永山武四郎像

札幌・円山公園に建てられた岩村通俊像

係にあり、幼いころからかわいがられていました。16歳で上京すると岩村の支援を受けながら、彫刻の勉強に励みます。

東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業しても、芸術家として身を立てるのは容易でないと心配した岩村は、需要の見込める政治家らの偉人像制作を手掛けさせました。おかげで本山は「銅像屋」と呼ばれるほど名声が高まったのです。

除幕式は1933年10月27日、札幌の大通西11丁目で行われました。式典後の祝賀会で、遺族を代表し岩村の次男俊武は次のようなことを語りました。

「銅像建設にあたり私は佐藤男爵（発起人総代）に手紙を出し、本山を起用するよう要請しました。幸い本山が制作者に選ばれましたが、他人の手で制作することになったら、本山はどれほど残念に思うことか。それどころか、昔の土佐の武士気質で腹を切ったかもしれません」。

像は1943年、戦時中の金属回収で姿を消しますが1967年、円山公園に再建されました。この時、除幕したのは孫の和俊。34年前の大通公園に次いで２度目の大役を果たしました。

一方、旭川の常磐公園には３代目の岩村像があります。最初に銅像建設を考えたのは郷土史・考古学研究家、小倉倉之助です。札幌の岩村像に刺激を受け、

旭川・常磐公園の３代目岩村通俊像

1936年には建立に向けた組織を結成します。しかし、翌年に日華事変が勃発し、事業は行き詰まりました。

その後、官民一体となって取り組むべきだという声が上がり1938年７月、銅像建設会が発足。小倉は発起人の一人として名を連ね、会長には市長の井上英が就任、市会議員全員が賛成人となり募金活動を展開します。

制作は札幌と同じ本山に依頼しました。札幌は大礼服姿でしたが、旭川はフロックコートを着用し、左手に上川開発の計画書を握っています。除幕式は1938年11月12日に行われましたが、５年後の1943年には金属回収の憂き目に遭います。

戦後、復活に立ち上がったのは、戦前の発起人の一人、坂東幸太郎でした。衆議院議員だった坂東は1951年４月の市長選挙に当選すると、さっそく再建に着手します。できれば銅像にしたかったでしょうが、戦後の資金難、物資難がそれを許しませんでした。２代目はコンクリート像となり、初代と同じ台座に設置し同年10月５日、除幕式が実施されました。

しかし、寒冷地のためまたたく間に老朽化。開基百年を記念し1990年、銅像に取り換えることになります。期成会を組織し地元企業などから協賛金を募り、市からは800万円の補助金を得ました。くしくも、市長は坂東幸太郎の４男徹でした。

同年９月17日の除幕式には岩村の孫ら一族約50人が大挙して出席し、銅像の再々建を祝いました。

（敬称略、肩書は当時のもの）

＜参考文献＞

- 井黒弥太郎「追跡・黒田清隆夫人の死」北海道新聞社、1986年
- 故永山将軍銅像建設事務所編「故永山将軍銅像建設費決算報告」故永山将軍銅像建設事務所、1909年
- 北海道百年記念事業施設建設事務所編「北海道百年記念事業の記録」北海道、1969年
- 佐藤昌彦「佐藤昌介とその時代」北海道大学出版会、2011年
- 故岩村男爵銅像建設会編「故岩村男爵銅像建設報告書」故岩村男爵銅像建設会、1934年
- 成田清編「上川開発と岩村通俊卿」故北海道庁初代長官岩村通俊卿銅像建設会、1939年
- 示村貞夫「枯痩の像―岩村通俊卿銅像考」『北海道経済』、1989年２～12月号